

# 「山古志 復興新ビジョン研究会」

## 第1回生活再生分科会 議事概要

1.日 時 平成17年1月25日(火) 13:50~16:00

2.場 所 ニューオータニ長岡 桂の間

### 3.議事概要

#### (1) 分科会座長挨拶(省略)

- ・ 長岡造形大学教授 平井邦彦

#### (2) 出席者紹介と配布資料の確認(省略)

#### (3) これまでの経過報告

##### 第1回全体会議

- ・ 事務局より説明(資料-3)

##### 第1回円卓会議

- ・ 事務局より説明(資料-4)
- ・ 質疑応答

#### (4) 復興新ビジョンにおける分科会方針の検討

##### 復興新ビジョンにおける基本方針

- ・ 事務局より説明
- ・ 意見交換

##### (上村委員)

集落とアプローチ道路の両方の安全が重要である。道路の復旧計画の目処が立たないと安全や適地の判断ができず、議論がしにくい。国土交通省の計画はすでに既存計画というべきで、ビジョンはこれと整合させればよい。生活再生においては、道路がいつできるのかというのが大きな制約条件になる。

##### (事務局)

帰村プロセスや方向性などは委員会で提案してよいと考えている。また既存の資料から地盤の安全性の評価を行いたいとも考えている。

##### 分科会における大きな方針の検討

- ・ 事務局より説明
- ・ 意見交換

(丸山委員)

地盤の安全性については、住民にも見てもらい、専門家と住民の評価のすりあわせをしても良いのではないか。

(深澤委員)

いまのところ区長が集落を代表して発言しており、住民個々の本音やニーズがでていないと思う。アンケートでもそれ以上のことはわからない。細かなところがわかってくると住民個々からいろいろな意見が出てくる。同じ山古志でも川筋や上下流で異なり、実際は相当に複雑である。

(丸山委員)

帰村には山古志人に戻るリハビリテーションが必要である。いまの仮設住宅の生活では、山古志らしい気骨や人のつながりなども弱くなっていると思う。山古志の「自立」と「復興」のためには、帰村前にやる気を引き出すようなケアが非常に重要なポイントになる。

(深澤委員)

長岡で住み続けると、全村帰村はむずかしくなる。帰れる人が帰り、自分の生活は自分で守る姿勢がいいのでは。実際に戻る時、辞退する人がでるかもしれない。

(上村委員)

- ・基本方向の1の にある、仮設住宅による帰村から再移転のケースは、いい方法だが、暮らしていけるかが課題であり、自給自足をどう支援するかをセットで考える必要がある。アイデアとしては、崩壊した棚田を国・県に購入してもらい、その資金をレンタル農地など復興事業に使うといったことも考えられる。
- ・分科会の方針のうち（平成17～18年）には精神、食糧、エネルギー、インフラなど総合的に見た「自立」を入れたい。
- ・生活再生と産業の関連で言えば、ツーリズムについては山古志と外部の視点から3段階あると思う。
  - 1) リストレーションツーリズム（復興ツーリズム）  
内部のオーナー、外部のボランティアによる田作り
  - 2) エデュケーショナルツーリズム  
子供たちの参加
  - 3) グリーンツーリズム（農家への滞在など）
- ・方針（平成19～21年）の公共施設整備のうち学校・保育所は同じ場所に作りたい。朝はスクールバスが走り、その後は高齢者を乗せて走るなど、村の中枢部では人がにぎわう環境にしたい。
- ・共同営農は採算が合うかどうか、農業だけで若い人がくるかどうかの問題である。農産物の加工品なら採算性があるかもしれない。また温泉やツーリズムと

のセットで可能性が高まるであろうし、「道の駅」など核となる場所や施設とのリンクをどうするかが重要である。

(深澤委員)

中山間地での共同営農はこれまでうまくいかなかった。道を作り、バイオマスなどの企業化の方向で進むことが必要である。農水省では17年度より宿泊型の「村の駅」事業をスタートするので、ビジョンでしっかり載せたい。

(平井座長)

復興ビジョンの基本方向が自己完結型すぎるのではないかと。もっと外との接点を持つ必要がある。

(澤田委員)

- ・道が通って人が戻ってきただけでは、中山間地の問題が繰り返されるだろう。子育て世代、食い扶持世代、あるいは竹沢のように家を失った人々など、ターゲットにすべき世代・対象を分けて考えるべきである。
- ・これからの山古志を考えると、生業としての農業はないのではないかと。棚田を風景として捉え、観光から棚田の維持費が出てくるようにする。アマンリゾートが参考になるのではないかと。
- ・お金を払う価値のある地域にしないと残っていかない。ただ住宅を再建して20年後に過疎で誰もいなくなったでは問題である。

(丸山委員)

世代をいくつかに分けて考えていく必要があるのではないかと。70歳過ぎて田を貸す人もいれば、熟年層は自分の田とレンタルの田をやっているし、それより若い人は町に出ており、考え方がそれぞれ違う。また外から山古志に入ってくる人の存在も考え、どこまでの期間を対象としたビジョンであるのか明確にする必要がある。

(澤田委員)

ターゲットを絞ることによる不公平感は、被害を受けた時点で家を失った人とそうでない人が不公平かということと同じ問題である。

(事務局)

今は山を出るか、残るかの選択肢ししかないが、ビジョンにより山古志に残った場合の選択肢が増えるようにしたい。

(丸山委員)

- ・村民に成功事例をみせ、村民自らが夢をもってもらえばアイデアも生まれる。それを専門家が支援するようにする。また養鯉を他人に教え、認定制度などを設け、交流人口を増やすことも考えられる。
- ・山古志には、カブなど特有の野菜がある。これをビジネス化すれば若い人もなんとかがやっていけるのではないかと。地域の資源を洗い出して案を整理してはど

うか。

(平井座長)

山古志の人だけではなく、外から参入できると思えるビジョンとなるかがポイントである。

(深澤委員)

集落別に年齢別人口をシミュレーションして、メニューを考えていく必要がある。

(上村委員)

- ・復興新ビジョンの基本方向に「周辺地域との協調、共栄、競争」を謳いたい。山古志には外からみたらすごい資源がたくさんあり、活用されていないのが現状である。それを外部の目で示すと同時に、人を集める仕掛けを考える。
- ・新エネルギーは処理に非常に困っているものが資源となる。例えば毎年3mも積もる雪を雪氷冷熱エネルギーの資源として活かすなど、頭を切り換えることが重要である。

(澤田委員)

直接払い制度など従来の行政支援がなくなっていく中、生活は全て自分たちで見つけなければならないということを示してあげる必要がある。新しいことを始めるなら、シビアなシナリオなどもあえて示す必要がある。

(深澤委員)

山古志村はすごい歴史やアイデンティティがある。しかし何もしなければ滅びる。ビジョンを持ったところが生き残るということになるかもしれない。

## (5) 今後のスケジュールについて

- ・事務局より、今後のスケジュールについて説明

閉会

(文責：事務局山口)